

発達障害者を対象とした小グループでの就労支援に向けた支援プログラムの試み

小林 菜摘（国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局 就労支援員）

四ノ宮 美恵子（国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局）

水村 慎也（国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局）

深津 玲子（国立障害者リハビリテーションセンター 発達障害情報センター）

車谷 洋（国立障害者リハビリテーションセンター 発達障害情報センター）

1 目的

国立障害者リハビリテーションセンター（以下「国リハセンター」という）では、平成20年度から平成22年度まで、埼玉県発達障害者支援センターまほろば等との連携により、「青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業」を実施した。

その中で、当モデル事業の利用者を対象に、「他者と協同して作業をすること」を目的に、文化祭で協同して模擬店を出店するという場面を用いて、小グループ訓練を実施した。そこで、試行した段階的なアプローチによるプログラムの内容と効果について考察する。

尚、この文化祭は自由参加であり、参加者が主体的に企画運営を行うことが求められている。

2 方法

（1）対象者

モデル事業の利用者A、B、Cの3名。DMS-による診断名は、それぞれ、特定不能の広汎性発達障害、アスペルガー障害、自閉性障害で、WAIS-によるFIQは75～127であった。いずれも学校生活において、行事へ役割を持ち主体的に参加する機会を得ておらず、集団での行事に参加することに対して苦手意識を持っていた。

（2）手続き

導入

はじめに、文化祭への参加の動機づけを高めることを目的に、「お菓子を手作りし、いつもお世話になっている職員をもてなす」という作業体験の場を個別に設けた。そこでは、支援員は利用者と支援者の二者間で協力して調理し、それを第三

者に提供しもてなすことで、「他者と協同して作業する」成功体験を得ることと、模擬店の基本的な要素である「商品を提供し、客をもてなす」ことを体験的に理解することを目標に介入を行った。

さらに、その他者と協同作業する成功体験をもとに、文化祭の参加への目的を明確化するための、個別の話し合いの場面を設けた。

グループ介入

つぎに、模擬店の企画から出店までの一般的な手続きから抽出した表1の活動課題に関して、支援員はファシリテーター的役割を担い、図2の介入の手続きに則り行った。各活動課題に対しては、課題の特性に応じて課題遂行場面を、話し合いの場を持つグループミーティング、または実際の作業を行うグループ作業に振り分け実施した。また、ファシリテーターの役割を担う支援員は、各段階において図3のメンバーの達成目標にそって介入を行った。

表1 活動課題

企画(模擬店内容と店名の決定、目標の決定)	展示物の内容の決定と作成
活動のルール設定と当日までのスケジューリング	宣伝広告の企画と作成
メニューの決定と諸経費の算出	買い出し等事前準備
レイアウトの決定と装飾制作	文化祭当日の作業
販売方法の決定と必要な様式の作成	反省会と売上の集計

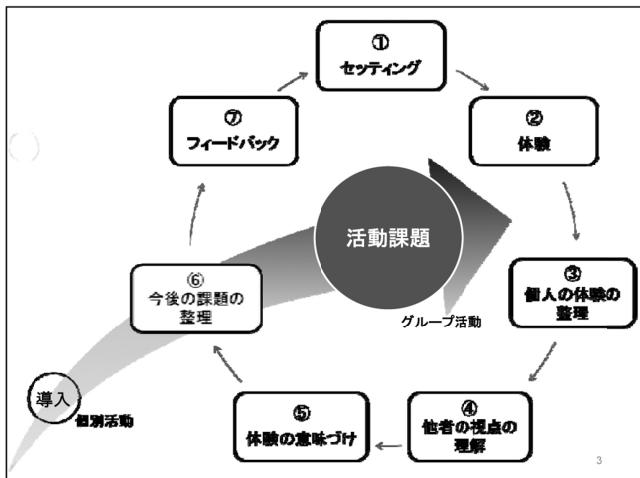


図2 介入の手続き

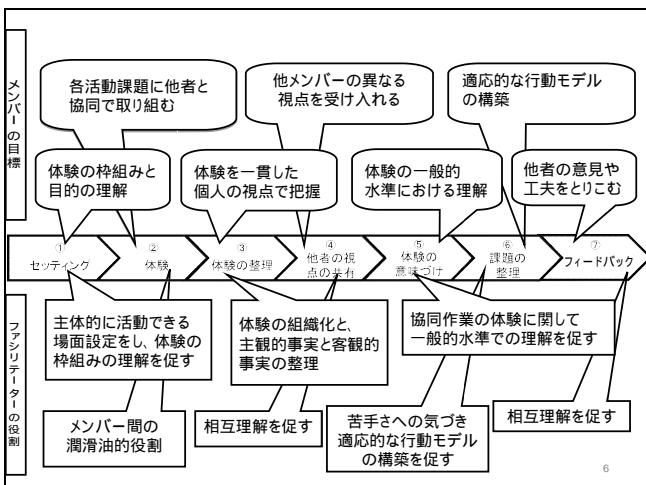


図3 各段階における介入目標

3 結果

平成2X年7月年10月の約4ヶ月間に60分を1コマとし、計73コマの介入を行った。その結果、個人差はあるものの表2、表3のような気づきと行動の変化がみられた。そして、文化祭直後にメンバーが記述した感想文に表5のような記述が見られた。

表2 協同作業に関する気づき

気づき	A - B - C
1.男女差	○○○○
2.経験の差	●○○○
3.能力の違い	○○○○
4.立場の違い	○○○○
5.相互の行動パターンの特徴	○○○○
6.相互の役割を理解する必要性	●○○○
7.報告と連絡の必要性	○○○○
8.作業の区切りを把握する必要性	●○○○
9.作業の分担をあらかじめ決める必要性	○○○○
10.作業全体の把握の必要性	●○○○

(注) :当該項目に関する気づきが見られたもの

:当該項目に関する気づきが見られなかったもの

表3 介入後に見られた変化

行動	A - B - C
1.作業時に役割分担をしようとする	○○○○
2.他者の行動によって自分の行動を調整する	○○○○
3.他者の作業スピードに合わせる	○○○○
4.相互に能力を補おうとする	●○○○
5.他者の作業状況を把握しようとする	●○○○
6.相互の作業スペースを調整する	●○○○
7.作業時に報告・連絡をしようとする	○○○○
8.他者を手伝う	○○○○
9.他者に手助けを求める	●●○○
10.作業の全体を把握しようとする	●●○○

(注) :当該項目に関して変化が見られたもの

:当該項目に関して変化が見られなかったもの

表4 各段階における介入目標

A	「おいしく食べてもらえてとても嬉しかったです」 「当日は沢山の客に買ってもらえたし、接客もうまくできとても楽しい一日でした」
B	「お店の流れなどを考えたりして、大変でしたが、お菓子づくりや当日のお店の仕事をやったりしてすごく楽しくできてよかったです」
C	「買ってくれた人もみんな喜んでくれたので大成功と言えるでしょう」 「色々大変なことも多かったけど、楽しかったです。また機会があったらやりたいです」

4 帰結の状況

対象者3名は、いずれも14ヶ月～15ヶ月の当モデル事業の利用期間を経て、Aはライン作業を中心とした職場に、Bは軽作業と事務処理を含んだ定型業務をグループで行う職場に、Cは事務職員としてそれぞれ就職した。個人差はあるもののいずれも職場での大きな問題はなく、就労を継続している。

5 考察

導入において、他者と協同作業する成功体験を基に、文化祭の参加への目的を明確化することにより、文化祭で模擬店を出店することへの肯定的イメージが構築され、その後のグループ活動への参加意欲が高まったものと考えられた。

グループ介入においては、段階的に文化祭参加の実際の体験における自己の視点と他者の視点を整理し共有していく手続き（図2の2～4）によつ

て介入したこと、体験の意味付けがなされ、協同作業に関する気づきが挙がったものと考えられた。そして、協同作業における個人の行動のフィードバックを行い、適応的な行動モデルを各自の実際の体験から再構築する（図2の5～6）手続きによって、行動の変化が生じたものと考えられた。

また、それらの協同作業における気づきや行動の変化が生じたことにより、他者と円滑に協同し文化祭に参加し役割を遂行できたことが、「行事に参加する」という体験が「楽しい体験」につながったものと考えられた。

対象者の帰結状況からは、他者と協同して作業をするという成功体験を得たことにより、他者からの働きかけを肯定的に受け入れられるようになったことが、その後の就職活動に良い影響をもたらし、就労につながったものと考えられた。

さらに、就労マッチング支援においては、本人の作業能力、適性に加えて、今回の支援プログラムで得られた個人の集団場面での行動特性を踏まえて、職場環境の選択を行った。その結果、個人差はあるものの、無理なく就労が継続されている。このことから、このような支援プログラムを行うことが、就労のマッチングをする上で有益な、集団活動場面でのアセスメントとなる可能性が示唆された。

今後の課題としては、今回の支援プログラムの結果で得られたような気づきや行動の変化が長期的に定着していくためのプログラムの検討と、気づきや行動の変化を促すことが困難であった項目に関する検討が挙げられる。